

ア 優しい味の料理を作ったくらいで心配する母親に対して、

「俺」はこれまで本当に苦労をかけてきたんだなと実感している。

イ 少しまともな生活をしている「俺」を不審に思っている母親に対して、そんなに信用されていなかったのかと疑問を感じている。

ウ 穏やかな味の料理を作った「俺」をほめている母親に対して、それくらいのことでは大したことないのにと照れている。

エ これから問題が起ころのではないかと不安を感じている母親に対して、もう昔の悪かった「俺」ではないのにと怒っている。

問六 —— 線③とはどういうことか、説明せよ。

問七 —— 線④とあるが、「釘をさす」の意味として最適なものを

次の中から選び、記号で答えよ。

ア 正しいアドバイスをする。

イ ひどくのものしる。

ウ 前もって厳しく言いよらせる。

エ 自分の考えをほめかす。

問八 —— 線⑤とあるが、母親が「俺」のことについて語っている時の気持ちについて説明せよ。

問九 本文の内容と合うものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 鈴香と「俺」との関係はとも良好で、「俺」の作る料理をいつもおいしそうに食べていた。

イ 積み木の値段の高さに驚いた「俺」は、母親が買おうとするのを何とかして止めようとした。

ウ 昔はちゃんちゃだっただ中武が父親となっていることを、母親は

「俺」から聞くまで全く知らなかった。

エ 先輩の中武から子守を頼まれたとき、「俺」は鈴香のために優しい味の料理を作ってあげようと考えた。

【三】 次の古文を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、静観僧正は西塔の千手院といふ所に住み給へり。その所は南むきにて、大獄をまもる所にて有りけり。大獄の乾の方のそひに、^①大きないはほあり。其岩のあり様、竜の口をあきたるに似たりけり。其岩の^{※注}すぢに向ひて住みける僧ども、命もろくして、おほく死にけり。しばらくは、「いかにして死ぬやらん」と、心も得ざりける程に、「此岩の有るゆへぞ」といひ立てにけり。此岩を毒竜の巖と^{※注}（*）名付けたりける。是によりて、西塔の有様、ただ荒れに荒れのみまさりけり。此千手院にも人おほく死にければ、住みわづらひけり。

此巖をみるに、誠に竜の大口をあきたるに似たり。「人のいふ事は、^{※注}げにもさありけり」と僧正思ひ給ひて、此岩の方に向て、七日七夜、^{※注}加持し給ひければ、七日といふ夜半ばかりに、空くもり、震動する事をびただし。大獄に黒雲かかりて、^④見えす。しばらく有りて、空晴れぬ。夜明けて、大獄を見れば、毒竜巖くだけて、散り失せにけり。それより後、西塔に人住みけれども、たたりなかりけり。

（宇治拾遺物語）

※注 乾の方のそひ……西北の急斜面

すぢ……筋向かいに

げにも……なるほど

加持……お祈り

もっぱいから、鈴香はちらりと見るだけで終わってしまうだろう。いかにも女の子が好きそうなおしゃれなドレスサーセット。やんちゃな鈴香には不似合いかな。お腹を押すと英語を話すピエロ。だめだ、こいつは顔が怖いから鈴香は泣くだろう。

生まれて二年も経っていない鈴香の気持ちはシンプルで、それがそのまま顔や動きに出てくる。そのせいか、一週間しか一緒に過ごしていないのに、鈴香の反応は手に取るように想像できた。

俺があれこれ眺めていると、

「これ、積み木は？ どう」

と、おふくろが重そうな箱を抱えて見せにきた。

「ああ、積み木か……。そういえば、なかったな」

「じゃあ、決まり！ あんたも積み木好きだったのよ。小さいころよく遊んでたわ。意外に器用でさ、二歳になるころにはなんやかんや作ってた。お城に車に、上手だったなあ。これ、木の感じが自然で素敵じゃない？」

おふくろが選んだのは、外国製のおもちゃらしく、木の色を生かしたきれいな色合いの積み木セットだ。派手派手しいキャラクターの絵が描かれているわけでもないし、先輩の家に増やしてもそれほど目障りにはならなそうさ。

「ああ、そうだな。じゃあ、それにすっか。つてか、八千円？ こんな木のかげらがそんなにすんのか？」

積み木の値札に驚き、ほかのおもちゃも見てみると、みんなそこそこいい値段がする。最近のガキはなんて高価なもので遊んでるんだ。

「こういうスタンダードなものって、長く使えるし。私が買うんだか

らいいでしょ」

おふくろはそう言って、大事そうに積み木を抱えると、さっさとレジに行ってしまった。

(「君が夏を走らせる」瀬尾まいこ)

問一——線AとCのカタカナを漢字に直せ。

問二——線aとcの漢字の読みをひらがなで書け。

問三「I」「IV」に入る最適なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

A なんて、夏にプレゼントすんだよ

I そういうもんじゃねえよ。誕生日でもねえのに、物与えるなんて、よくねえだろう

ウ そうだ！ 夏だしさ、鈴香ちゃんになにかプレゼント買いに行こう

エ 確かに鈴香はおもちゃをあまり持ってなかったな

オ 夏休みって、そういうもんじゃないの？

問四——線①に含まれないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A 休みの日に出かけず家にいること。

I 台所で料理をしていること。

ウ 料理をしながらジュジュウと言っていたこと。

エ 夜に早く寝てしまうこと。

問五——線②の時の「俺」の気持ちとして最適なものを次の中から選び、記号で答えよ。

「なに、まともぶってんのよ。なにも悪いことしてないのに、一番大好きな母親と会えないのよ。しかも、あんたみたいなガラの悪いのに毎日付き合わされてさ。少々甘やかしてあげたっていいじゃない」

おふくろはわけのわからない理屈を堂々と言うと、「料理なんて夜に作れば？ さあ、早く行こう」と勝手にショッピングモール行きを決定してしまった。

昔からどこかおおざっぱで、大胆なおふくろだ。一度決めてしまうと、行動に移さないと気が済まないところがある。まあ、そんな大きな性格だから、俺みたいなのを育てられたのかもしれない。

「おい。おふくろと買い物なんてマジやばいから。離れて歩いてくれ」と俺が言うのも聞かず、ショッピングモールに着くと、おふくろは、「鈴香ちゃんなにが好きかな。一歳十ヶ月か。いろいろ興味出てくるころだよ」と足どりを弾ませた。

「だから、近づくなって」

「なにがよ。離れて歩いて、大声で話してるほうが変でしょう。それにしても、中武君がまじめになったって話、仕事先のおじさんたちからも聞いてたけど、家族を持つてるなんてね」

③ マイペースなおふくろにどう言っただって無駄だった。まだ昼過ぎだから誰にも会いはしないだろう。俺は周りを見回しながらおふくろとつかず離れずの距離を取って歩いた。

「でも、ああいうやんちゃな子ほど、早く身を固めるのよね」

「ああ、しかももうすぐ二児のパパだからな」

「本当、すごい変化だわ」

昔、先輩はよく家にも遊びに来て、たまにおふくろとも出くわすこ

とがあった。悪かったときの先輩しか知らないおふくろにとっては、父親になったというのがものすごい出来事のように、何度も「中武君もやるわね」と感心していた。

「なにこれ。最近のおもちゃってすごい」

おふくろはおもちゃ売り場に着くと、目をカガヤかせた。華やかなおもちゃから昔ながらのおもちゃまでずらりと並んでいる。

「母親がいなくて言っても、なにも困っちゃいないんだぜ。おもちゃもいっぱい持つてるし、服もかわいいのたくさんあるしよ」

④ この調子だとおふくろは、大量に買いこみかねない。俺はしっかりと釘をさした。

「わかってるって。一つくらいプレゼントしてもいいでしょう。あんたが面倒見る数週間、楽しく過ごせるものが必要だろうしさ。あ、これ、ままごとセットは？ 女の子好きなんじゃない」

「ままごとはあるある。たくさん」

「じゃあ、これいいじゃない。お絵かきボード」

おふくろは絵を描いたら消せる磁石を使ったボードを指差した。「同じようなのあったって」

鈴香の家にもお絵かきボードがあって、強引に描いて壊したのだろう。表面がぼこぼこになっていた。

「ぬいぐるみもやまほど持つてるぜ」

俺はぬいぐるみを手を取ったおふくろに先に忠告した。

「そうなるよ、なにがいいか難しいわね」

子どものおもちゃって、いろいろあるものだ。俺は柵にぎっしり並べられたおもちゃに目をやった。ぐるぐる回転する人形。これは子ども

「なにがって、なにもかもよ^①と顔をしかめた。」

おふくろは、土日以外は毎日朝七時半には出勤し、夜九時過ぎまで仕事をしているから、俺とはほとんど顔を合わせない。どうしたも何も、俺のドウコウなど知らないはずだ。

「なにもかもって?」

「最近、妙にはりきってるからさ。彼女でもできたのかと思えば、夜はさっさと寝てるみたいだし、休みは家にいるし。また走り始めたのかと思いきや、さほど体はしまってないしね」

「はりきってなんかいねえけど」

「あんた、気づいてる? さっき、フライパン揺すりながらジュシューって言ってたわよ」

「マジかよ」

「ものすごく不気味だった」

おふくろはそう言いながら、俺が作った豆腐ドリアを口に入れた。

「なに、このふんわりしたソースにはののかな味」

「うまいだろ?」

「確かに。パンチはないけど、全くくどくないし、味も食感も柔らかい」

「豆腐と味噌とジャガイモでソースを作ったんだ」

「この味、味噌だったんだ。しみじみとおいしいわ。で? 何事?」

こんな体に優しいような料理作ったりして、問題が起きる前触れじゃないわよね?」

「んなわけねえだろ」

「この穏やかさは妙よ。近々ケイサツと呼ばれるとか、勘弁してよ」
おふくろは本心に心配しているようだ。まったく、実の親のくせに何を言ってるんだ。少々まともな生活を送ったところで、母親の不安すら消せやしないとは。俺はそんなに悪かったのだろうか。

「バイトしてんだよ」

「バイトって、なんの?」

「なんのって、こともねえんだけど」

「はつきり言えないようなおかしな仕事してるんじゃないでしょうね」
「まさか。まあ、なんつうかさ」

あまりのしつこさに俺がしぶしぶバイトの詳細を話すと、驚いたおふくろは「恐ろしい!」と絶叫し、「そんな怖いことよく引き受けたわね。大事なお子さんになにかあったらどうするの」と震え上がった。

そのくせ、俺しか頼める人がいない先輩の状況を説明すると、「あんたはできた息子だ。人を助けてこそなんぼだね」と目頭を押さえ、「それなら我が家で預かってあげよう」と出過ぎたことを言いだした。俺が説得しそれは何とかあきらめたものの、その後も鈴香の様子をおもしろそうに聞いていて、「あの中武君がしっかりお父さんになってるんだ」と感動したり、「そうそう、子どもってそうなんだよね」と共感したりした。

「 I 」

鈴香のことをひととおり聞くと、おふくろはそう提案した。

「 II 」

「 III 」

「 IV 」

ていたのかもしれませんが。

さて、ソクラテスは魂（心）について気づかうように人々に語りかけたのですが、わたしたちは自分の心のあり方について、どのように気づかえばよいのでしょうか。③ どうすれば「すぐれたよい者」になることができるのでしょうか。わたしたちはそのようにすぐに結論へ行こうとしますが、ソクラテスは急ぎません。（Ⅲ）、「徳の何であるかを見失っているのは、まず誰よりわたし自身なのです」という答をわたしたちに投げ返してきます。たとえ答が得られなくても、それについて問い、議論し、吟味することが求められるような、そういう問いがあるということをソクラテスは語ろうとしたのではないのでしょうか。「魂（心）のよさとは何か」という問いも、まさにそのような種類の問いであると言えるでしょう。

プラトンが書いた『ゴルギアス』という対話篇（プラトンの著作は対話の形で話が進行していきますので、このように呼ばれています）では、ソクラテスは、少しこの魂の「よさ」について語っています。

この対話篇では、三人の人物がソクラテスと対話をしますが、最後に登場するカリクレスは、現実の政治の世界ではなばなし活躍をしている人物でした。そのカリクレスがソクラテスに対し、自然なままに生きること、つまり欲望を抑えることなく、そのジエウソクをはかることこそが正義であり、善であるということを主張します。それに対してソクラテスは、人間の欲望とはどこまでいっても満足することのない「孔のあいた甕」のようなものであり、欲望に踊らされた人生を送るのは、決して幸福でも、善でもないと言います。そして他者への配慮をまったく行わず、ただ自分の欲望の満足だけを強欲に追いか

める生き方をソクラテスは「盗人の生活」と表現しています。

ソクラテスは、ものごとをよく考え、欲望を抑えて心を秩序正しい状態に保ち、他の人への配慮を行って、互いに力をあわせることが、わたしたちがめざすべきものであるという考えをもっていたと言えます。

しかしそこで、なぜわたしたちは自分の欲望を抑え、他の人に対して配慮をしなければならないのか、という問いが浮かびあがってきます。なぜ他者に対して配慮をすることが「よく生きる」ことにつながるのでしょうか。こうした点についてソクラテスはザンネンながら詳しいことを語っていません。わたしたちに残された問いであると言ってよいでしょう。

※注 ソクラテス……古代ギリシアの哲学者

ポリス……都市国家

『はじめての哲学』藤田正勝

問一 〓 線 A ～ D のカタカナを漢字に直せ。

問二 〓 線 a ～ c の漢字の読みをひらがなで書け。

問三 本文からは次の一文が抜けている。入るところとして最適なものを《ア》《B》《C》《D》《E》の中から選び、記号で答えよ。

したがってたとえば、美しく粧うことに何より気をつかうことや、富を蓄えることに必死になるといったことが考えられていたと言ってよいでしょう。